

所属・資格 国文学科・助手

申請者氏名 鈴木 雅裕

| | | |
|---|--|--|
| 研究課題 | | 『古事記』を中心とした上代文学の研究 |
| 報告の概要 | 研究目的 および 研究概要 | <p>本研究は、『古事記』の分析を糸口として、上代文学および日本における八世紀の諸相を捉えることを目的とする。その研究目的を達成するために、本年度は次の二点の研究を実施する。一つは、三巻で構成される『古事記』の中・下巻を対象に、系譜と物語との相関性、および物語内の神話的表象を考究していくこと。前者は、主に誤伝とされてきた系譜の見直しを行うことで、あらためて作品の性格を考えてみるもの。後者は、歴史を語る上で神話的文脈がいかにか働いているかを明らかにしていくものである。</p> <p>いま一つは、上巻に記された神話の読解である。すでに多くの研究史が積み上げられているが、いまだ問題となるところは少なくない。そこで、注釈的な作業を進めることで、先行諸説を整理しながら、問題の具体化と考察を深めていく。</p> |
| | 研究 の 結果 | <p>研究発表①は『古事記』上巻の国生み神話を取り上げ、問題視されてきた佐渡嶋の神名記述が八世紀という時代の問題として論じられることを指摘した。②は中・下巻をつなぐ大雀命（仁徳天皇）について、史学的な見地から成されてきた前代応神天皇との重なり合いをテキスト分析の側から考え直したものである。</p> <p>研究成果物①～③は、昨年度から開始した『古事記』上巻の注釈作業だが、研究計画通り、本年も年間3本のペースで公開できた。④はヤマトタケルに関する系譜分析について、著しい誤謬として捉えられてきた箇所を取り上げ、王権の神聖性を語る意味合いを有するものであることを論じた。</p> |
| | 研究 の 考察 ・ 反省 | <p>研究発表についてはいずれも、研究史をあらためて捉え返した上で問題点をどのように考えられるかを考察したもの。ただし、具体的な論証及び研究史に対する自身の立場が明確に提示出来なかった点が反省である。この点は、活字化に向けて補っていきたい。</p> <p>研究成果物に関しては、これまで活字化した論文及び④を含め、博論論文『古事記』における神聖王権の表象に関する研究』として現時点での体系化を行うことができた。こちらについても体系化したことで多くの課題が浮上したが、そうした点を改めて論じつつ、著書としての刊行を目指したい。</p> |
| 研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 | <p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>【研究発表】</p> <p>①『古事記』上巻・国生み神話—深層の対外意識を視座として—(日本文学協会・2019年7月7日・京都女子大学)</p> <p>②応神記における大雀命の造形(古事記学会・2019年4月20日・学習院女子大学)</p> | |
| 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者 | <p>【研究成果物】</p> <p>①教室で読む古事記神話(五)—匍匐御枕方から殺迦具土神まで—(『語文』166・日本大学国文学会・2020年3月25日・42頁～54頁)*梶川信行氏と共著</p> <p>②教室で読む古事記神話(四)—既生国竟更生神から遂神避坐也まで—(『語文』165・日本大学国文学会・2019年12月25日・14頁～28頁)*梶川信行氏と共著</p> <p>③教室で読む古事記神話(三)—還降改言から還坐之時六嶋まで—(『語文』164・日本大学国文学会・2018年6月25日・49頁～65頁)*梶川信行氏と共著</p> <p>④神聖なる王権への助走—景行記系譜の異世代婚をめぐる—(『古代中世文学論考』38・古代中世文学論考編集会・2019年5月25日・5頁～33頁)</p> | |